

るようであるから、予定されている雍正朝の分全三十冊の出版が完結するには今後数年を要することであろう。長年月にわたる仕事はまことに苦勞なことであるが、立派に完成する日の来るのを祈念してやまない次第である。最後に一言申し添えれば、根本史料の公刊という折角の大事業であるから、可能な限り慎重を期して頂きたいと思う。第一輯、第二輯を通覧したところでは、少々印刷の不鮮明な部分が若干あるが、今後はより細心の注意を払われるよう切望してやまない。

(第一輯、第二輯 B5版 台北 国立故宫博物院 中華  
民国六十六年十一月、十二月)

ロイ・ホフアーンズ Jr. 著

### 砕けた波——中国共産党の農民運動、

一九二二—一九二八年——

片山 剛

まず、本書の構成を示すと、次の通りである。

#### 序言

#### 第一部 戦略

#### 第一章 農村戦略の誕生

批評と紹介 片山

#### 第二章 農村戦略家としての毛沢東 第二部 組織

#### 第三章 革命の配置・国民党農民部

#### 第四章 革命教育・農民運動講習所

#### 第五章 大衆の組織化・農民協会

#### 第六章 社会的背景・成功と失敗の説明

#### 第三部 実践

#### 第七章 革命の起源・海豊の彭湃、一九二二—一九二四 年

年

#### 第八章 依存政策・広寧、一九二四—一九二五年

#### 第九章 敵の顔・花県、一九二六年

#### 第十章 人民戦争の誕生・海豊、一九二七年

#### 第十一章 革命の死・海豊、一九二八年

#### 第十二章 中国農民運動の遺産

本書の標題『砕けた波』とは、一九二二—二八年に華南を中心に彭湃としてわきおこり、そして砕けちった農民革命の大波を意味するものであり、かつ、中国農村共産主義の父たる彭湃を高く評価せんとする著者の意図を表現したものである(序言)。本書は、のちに「人民戦争」として知られる農村坳地戦略の誕生・形成について、延安時代よりも大革命期にその大きな根源があったこと、とりわけ、二〇年代の中国に特有な政治環境が、その誕生の、また二〇年代末の一時

的崩壊の大きな要因となったことを論証しようとしたものである。

第一章では、この二〇年代の政治環境について論じている。外的環境としては、二〇年代以降のコミンテルンの農民・農村問題の重視があった。なかでも、二五年のブハーリンの「農村が都市を包囲する」という発言は、農村戦略概念形成の上で重要であった。内的環境としては、(一)二〇年代の軍閥混戦という「政治問題は必然的に軍事問題に移しかえられる環境」、(二)「共産党が未だ支配的政党でなかった環境」、(三)「農村が未だ政治的に空白であった環境」があった。以上の政治環境は、二四年の国共合作開始時には農民運動開始の要因となった。すなわち、孫文は自己の軍事力・財政力補強の一手段として、農民組織化を意図した。一方、陳独秀は、共産党そのものの基盤拡大のために農民を組織化する意図はなかったが、国民党の基盤拡大のために、広東の共産党員に農村工作の開始を指示した。いずれも農民の眞の革命性を重視したのではなく、むしろ軽視したものであった。農村工作の開始は、「国共合作の意識的産物ではなく、むしろ偶然であった」(二八頁)とさえいっている。ところで、前述の政治環境は、二〇年代後半には農民運動崩壊の要因ともなった。ここでは広東での農民組織化の必要性消失にのみふれておく。すなわち、蔣介石麾下の国民党軍の強大化につれ、軍

事的側面から農民を組織化する必要はなくなり、また、広東の統一化につれ、農村の大変動よりも政治的・財政的安定が求められるようになった。なお、本章の後半では、以上の要因に加えて、広東の農民運動が減租運動にとどまったこと、民団の反攻で農民協会の存在すら危ぶまれたこと、農民運動指導者が現実の情勢に適合した政策をとったこと等をあげ、非現実的な土地国有化を掲げて闘争を激化するようなことはなかったとして、運動崩壊の要因を陳独秀の右翼日和見主義にもとめる中国側通説を批判している。

第二章に副題をつけるとすれば、「幻想から現実へ」が適当であろう。「澎湃と異なり、毛は農村運動の実践よりむしろ熟慮・計算を通じて、おそくに農村戦略に転向した」(二九～三〇頁)、そして、二七年九月の秋収蜂起まで、本質的には「幻想的な「リディカリスト」であったとして、毛沢東についてユニークな見解を示している。

(一)二五年夏の湖南農村での毛の活動は、澎湃式の農民協会を組織したものではない。反帝を眼目に農村インテリを雪恥会に組織したものにすぎず、農民問題にはあまり関心をもっていないかった(六章二二八～二二九頁、十二章二九六～二九七頁)。

(二)農民問題の重要性認識は、二六年三月の農民運動講習所長就任に始まる。とくに、海豊の農民運動発展をまぢかにみ

たことによる（十二章二九六―二九七頁）。この変化については、二六年二月の論文「中国社会各階級の分析」と、九月の「国民革命と農民運動―農民問題叢刊序」とを比較して論証している。すなわち、前者が、革命における農村と都市の役割を同等に扱っているのに対し、後者が、革命の中心を明確に農村におき、かつ、革命党内部の農村軽視者Ⅱ一月時点の自分自身、を批判しているからである。ここから、著者は毛の農村戦略家としての文献上の起源を二六年九月とする。しかし、それは実践経験をもたない「幻想的」なものであり、二六年末の湖南農民運動視察は、この「幻想性」をさらに増大させた。

(三)しかし、毛の武漢政権への参画、そして、国共合作維持の要請は、毛を「幻想」から「現実」へひき戻した。それは、二七年四月、武漢の中央土地委員会席上の、土地の政治的没収を主張する態度にみとれる。

(四)しかし、二七年七月の国共合作の崩壊は、毛を本来の「幻想的ラディカリスト」にひき戻した。それが秋収蜂起であった。秋収蜂起は、農村から都市を包囲する路線が確立した点で一つの画期である。毛は、長沙を一九一七年ロシア革命のペテルブルクに比定し、蜂起の拠点としての長沙奪取Ⅱ省レベルソビエトの樹立Ⅱ土地革命の実行、を構想していた。毛の構想したのが農村ソビエトではなく、省レベルソビ

エトである点、大都市を拠点とする点等から、著者は、中国側通説を批判し、毛は未だ農村根拠地戦略に思い至っていなかったとしている。しかし、著者は、蜂起の主力を軍隊においた点を、毛と中共中央を分つ大きな相違としている。長沙奪取を第一とする毛にとって、奪取の可能性なき蜂起の継続は無意味であった。著者は、ここに井冈山への退却の必然性があったという。井冈山での現状認識の深化、戦略の再検討が、中国の政治環境に適合的な農村根拠地戦略Ⅱ人民戦争を生んだ、としている。

第三章。国民党は二四年の改組により、形式的にはボルシエヴィキ的政党となった。しかし、その実質は依然として孫文個人への忠誠を支柱とする家父長的色彩の濃いものであった。国民党員は、共産党員の党中央への進出や、農民組織化による党の大衆政党化を歓迎しなかった。このため、共産党は、強力な親農民組織を国民党内に建設できず、ただ農民部長に廖仲愷らを配して、国民党の援助を得るのみであった。従って、国共分裂は共産党に国民党への気兼ねなしに農民運動を展開する好機を与えた。しかし、国共分裂は、それなくしては生き残ることができない国民党のもつ財力・軍事力を失なうことをも意味した。著者のいう政治的條件の喪失である。

第四・五章については簡単に紹介しておく。農民運動講習

所全七期の卒業生約一七〇〇人中、農村に赴いた者は一〇〇〇人ほどであり、広大な中国農村に比して、量的に著しく少ないこと。また、四期までの卒業生の約三分の一、一二〇人ほどが国民党中央の諸機関に残ったことにもみられる、官僚主義的な性格、等である。農民協会は、草案では、階級別土地所有の相違にもとづき、自耕農協会・佃農協会・僱農協회를設立することになっていた。しかし、土地所有の相違による区分は、中国農民にはなじみにくいものであるため、実際には、地主を除く全農村住民を単一に組織する形態となった。なお、その組織的欠陥として、ヒントン『翻身』に登場するような、運動への職業的献身さをもつ在地の農民組織者の欠如等を指摘している。

第六章では、農民運動発展の地域的不均衡性について、非常に興味深く、かつ示唆的な見解を展開している。

(一)。広東では、海豊・広寧に代表される東江・西江地方で、減租運動を中心に農民運動が顕著に発展した。しかし、中国の農業最先進地帯の一つである珠江デルタでは、あまり発展しなかった。この問題について、著者は、経済的にはデルタの農民は、土地保有権の保証・商品作物栽培による利益等により富裕であった、とする。一方、東江・西江地方の生産関係は、副租や凶作時の地主の減租義務を内容とする、より伝統的なものであった。しかし、清末以降、この地方の地

主は商品経済利潤の追求から、凶作時の減租義務を放棄した。このことが、この地方の農民に減租運動の方向を与えた、とする。また、東江・西江地方には、同盟会以来の国民党員や、新エリートたる黄埔軍官学校卒業生が少ないこと、逆に、デルタには、旧来の国民党員が、そして省境の遠隔地方には、黄埔卒業生が多い、という現象的事実からも、この不均衡性を説明しようとしている。

(二)。湖南の農民運動は、広東その他の省と異なり、省内の最先進農業地帯たる大都市長沙周辺で発展した、という例外性をもつ。著者は、その要因として、長沙周辺と珠江デルタの農村の社会経済的相違とともに、政治的条件の相違を重視している。すなわち、湖南は一〇年代末以降、軍閥支配下にあったため、同盟会以来の国民党の基盤は消失していた。それを二〇年代に再建したのは、夏曦・劉少奇ら共産党員であった。このため、広東と異なり、湖南の国民党及び北伐後の省政府を、大部分共産党員が占めるといふ、農民運動にとって有利な条件が存したのである。なお、広東と湖南の農民運動の質の異同については、「広東の農村革命に崩壊をもたらしたのと同じ勢力〔反革命的秘密結社、地主の団防等〕が、湖南にも未発達の形で存在していた」（一三三頁）として、一般にいわれる不連続性Ⅱ質の相違を否定している。

第七章の国共合作前の海豊については、日本の研究もいく

つかあるので、そのいちおうの成功の要因についての著者の見解を紹介するにとどめる。すなわち、彭湃の陳炯明との特別な関係、彼の実験主義的方法、そして最初の農民運動であったため、地主・紳士が不意をつかれて、十分に対処しえなかつたことである。そして、この運動戦術は特殊であり、一般化しうる経験ではなかつた、としている。

第八章。広寧の農民運動にとつて大きな障害となつたのは、地主の暴力装置たる民団の存在であつた。二四年六月、減租をスローガンとした運動は、民団のために一時後退した。しかし、国共合作の開始、そして六月の廖仲愷の省長就任は、国民党軍の派遣という援助を広寧に与えた。その結果、農民協会は民団に攻勢をかけ、二五年二月、減租をかちとつた。しかし、第一次東征参加のための国民党軍の広寧撤退は、民団の勢力伸張を許した。この間、農民協会は民団に対抗しうる武装力確保のため、秘密結社「神打」に働きかけたが失敗した。こうして、貧弱な農民自衛軍のみを基礎とする農民運動は、二六年三月以降の国民党右派勢力の台頭、すなわち運動の保護者たる国民党軍の喪失という状況の中で、軍事的にはるかに上回る民団・神打の連合軍のために衰退していった。

第九章。二六年夏、広州に近い花県で民団の農民協会弾圧事件が起こると、彭湃らは国民党軍の力により、民団を粉砕

することを企図した。しかし、二六年夏という時点での国民党の対応は、二四～二五年の広寧のように好意的ではなかつた。農村でも県長・国民党官吏が、平和維持と基金募集をめぐり、協会と対立していた。広州からの調査団派遣は、民団の弾圧を一時的に停止させる妥協的なものにおわり、調査団の花県退出は、民団の弾圧再開となつた。著者は、この二六年の広寧と花県の経験から、農民運動保護者としての国民党軍喪失は、彭湃らに共産党に忠実な軍隊の必要性を痛感させた、としている。

ここで非常に興味があるのは、標題に示された「敵」、すなわち民団、大族の私兵、及び神打についての著者の指摘である。花県の場合、江姓族人は農民運動・国民党調査団を村内秩序を破壊する外部侵入者とみなした。広寧での民団と神打の連合も、「広州革命勢力に対する自衛を名目として」(二〇五頁)なされたものであつたという。著者は、これら準軍隊クォン・アームズの性格を、軍閥でも、国民党軍でも、農民運動でも、およびそ村内秩序を乱す外部侵入者に対する抵抗力と規定する。そして、国民党と地主・民団との結託は、この平和・秩序の維持を共通利害として進行し、二七年の反共ページも、これら「農村の平和維持勢力」を基礎にして行なわれた、としている。

第十・十一章では、まず二五年の第二次東征後、海豊で他

県に比べてはるかに左傾化した農民運動が行なわれた要因として、民団組織が弱体であったこと、そしてさらに、海豊の地主・紳士がその陳炯明との関係から、国民党の政敵であったため、土地・財産の政治的没収が容易であったことを指摘している。次に、(一)いわゆる「人民戦争」が二七年夏の海豊で、すでに自覚的に展開されていたこと、(二)海陸豊ソビエトの崩壊の要因、について論じている。

(一) 二七年四月の蔣介石の反共クーデターは、広東では李濟深らの反共ページとなった。海豊では、五月、九月、十月と三度の蜂起が行なわれた。そして著者は、第一次蜂起後の二七年夏に大きな戦略的変更があったという。すなわち、二七年夏の海豊には、人民戦争の客観的条件としての、⑦デ・ファクトの農村と都市の分裂、⑧発達した地下組織、⑨最も重要な要件としての都市権力機構の麻痺した真空状態、が存在した。そして、革命の長期性の認識にもとづく、山間根拠地への後退の方針が採用されていた。「長期的闘争の中で、農村をして都市を攻撃させ、広州と地方軍隊があえて「都市の」外に出たがらないという有利さを利用した人民戦争戦略が晩夏の海豊で非常に有効であった」(二四三頁)という。

(二) しかし、この人民戦争戦略を大きく方向転換させることが八月におきた。それが秋取蜂起を決定した八・七緊急会議であった。九月、この中央の決定に従い、自己勢力の損失

を伴う、破壊と略奪の第二次蜂起が行なわれた。そして十月の第三次蜂起と続き、十一月にアジアで最初のソビエトが樹立された。しかし、海豊の人民戦争には、その本質的要素と著者が規定する保護、すなわち軍隊が欠如していた。二八年二月、海陸豊ソビエトは、国民党の圧倒的な軍事力によって粉砕された。ここから著者は、「ひとたび人民戦争にまで発展したすべての農民運動の究極の結末は、「ちようど一九四九年のように」必然的に軍事的なものになる」(二八三頁)と結論する。

第十二章では、著者の幅広い関心から、近現代中国についての示唆に富んだ見解を開陳しているが、ここでは簡単に紹介する。(一) 二〇年代に共産党員が共通に抱いていた信念は、⑦巨大な農村住民が、国内で最も強大な勢力である、⑧この農民の力を利用する鍵は、農村に浸透することである、⑨組織は闘争を通じてのみ建設できる、⑩「大衆組織がある適当な大きさにまで発展すれば、革命は成就する。何百万人という農民が農民協会に入会し、下から国民党に入党すれば、国民党は変容しないではいられない」(二八六頁) 陳独秀の「国民党左派」の概念であった。著者はこれらに含まれる幻想性を指摘し、「これらの認識は戦略と呼ぶに値するものではなかった」(二四八頁) とする。著者がこの時期を農村戦略の「確立」ではなく「誕生」と呼ぶ所以であ

る。(二)二〇年代末の敗北の要因として、⑦共産党の弱体、そして、「暴力における非共産党スベンシャリスト」〔国民党軍、民団〕の著しい発達、⑧国民党がボルシェヴィキ的政党でなかったこと、⑨ラディカルな農民運動に対する、「農村平和維持勢力」の反攻とその根強さ、をあげている。すなわち、崩壊は著者のいう当時の「政治」によって規定されたとする。(三)。教訓は、「組織され、集中化された武装力」の重要性、「政治的行為のための軍事的保証」である。今日の中国への遺産として、⑩農業革命、第三世界問題をも含む、非常に広範囲な内容をもつ概念としての農村中心主義、⑪大衆に対する幻想的信頼、⑫軍隊の重視、⑬モスクワに対する高度の自律性、をあげている。最後に、この農村革命戦略Ⅱ人民戦争の今日の中国及び第三世界における有効性を論じ、それを否定している。すなわち、「理論上考えられる農民革命などというものはない。」なぜなら、人民戦争は、当時の「中国の社会的、軍事的、なかならず政治的現実」に対応して形成されたものであり(三〇四頁)、政治的情況が異なれば、その戦略も必然的に異なってくるからである。

以上、私の能力の関係もあり、紹介が大部分となってしまうが、ここで若干の問題点を指摘しておきたい。著者が二〇年代の政治環境を問題としているにもかかわらず、第一次大戦後の帝国主義の問題をほとんど考慮せず、民団——商団

の関係には触れても、その先にある帝国主義に言及しないため、説得力に欠ける憾みがある。帝国主義と関連させながら、二〇年代の生産・流通構造の問題をもとらえるべきであったと考える。また二〇年代の国民党を、たんに家父長的性格のみで規定してよいであろうか。とりわけ一つの政治権力となった二〇年代については、その経済的・財政的基盤についての階級的性格の検討が必要と思われる。そしてこの点からも、国民党と「農村平和維持勢力」の結托の進行を検討すべきである。第六章の発展の不均衡性の問題については、珠江デルタを中心に若干の私見を述べておきたい。この時期のデルタ農民にとっては、地代よりはるかに重い苛捐雑税が大きな問題となっていた。他方、広東統一前の国民党政府が支配し、財源としうる地域は、広州周辺のデルタに限られていた。苛捐雑税は、もちろん地方紳士・地主の財源であったが、国民党政府及び政府下の軍閥の主要な財源でもあった。この点からいえば、デルタ農民の苛捐雑税反対の要求は、運動として生起・発展しにくかったと思われる。中山県では、二五年十月、苛捐雑税反対の闘争がおきた。しかし、それはデルタを財源とする政府・軍閥の冷眼の中で実現しえなかった。この点からみるなら、デルタでは国民党と地方平和維持勢力との連合が、より早くから展開していたと予想される。現象的には発展しなかったが、問題そのものが存在しなかつ

たわけではない。なお著者はデルタ農民について、「中国の他の多くの地域と同じく、この地域〔デルタ〕の高度の小作制は、富裕な稲作農民へ向けての福利の増大を伴って進展した」(二二一頁)と説明している。しかし、デルタ及び「他の多くの地域」の農民が「富裕」であったという指摘には、疑問を提示しておきたい。また微細な点に及ぶが、著者が東江・西江のより伝統的な生産関係を、「包農制」(二二一頁)と呼んでいるのは、明らかな誤りであるので指摘しておく。

本書は、中国革命を政治革命の面から論じており、農村における社会革命の意義をやや軽視しているきらいがある。しかし、従来の研究では十分に展開されていなかった農民運動の開始とその崩壊の要因について、一貫性をもたせた見解を示している点、多くの通説批判を行なっている点は、われわれ日本人研究者にとって大きな刺激になると思われる。

註

- (1) Roy Hofheinz, Jr., "The Broken Wave—The Chinese Communist Peasant Movement, 1922-1928—" Harvard U.P. (1977) 355p.
- (2) Roy Hofheinz, Jr., "The Autumn Harvest Insurrection", *The China Quarterly*, no. 32(1967) 参照。
- (3) 羅綺園「中山農事変遷の経過及現在」、『中国農民』第一

期(一九二六年)、及び横山宏章「広東の客軍と孫文の政治指導」、『アジア研究』二三―四、(一九七七年)参照。  
\* 文中の傍点、及び「」はすべて片山のものである。

新疆維吾爾自治区文字改革委員会編

維語正字詞匯(維漢对照)

新疆教育出版社編輯

漢維簡明小詞典

梅村 坦

中国の新疆維吾爾自治区内では最も多数の人口をもつウイグル族の言語であるウイグル語に關係する辞書二冊が、一九七六年に相次いで刊行された。これらは、中国の漢語拼音表記の大問題と並行して進められてきた少数民族言語のラテン字表記政策の、そしてウイグル語の新正字法の実現・実用化の歴史的成果である。

古く、九世紀頃から、ウイグル族は民族的にも変様をしつづけたが、その言語表記——正字法——も大きく幾たびか変わってきた。そこで、まず、その跡をいく簡単に辿ってみることにする。